

ストレスイベント後の成長感に時間的要因が与える影響の検討

—実際の経過期間と個人のもつ時間意識に着目して—

○千葉柊作(東北大学大学院教育学研究科)

キーワード:PTG、時間意識、ストレスイベント

目的

近年、ストレスフルな体験をした後に生じる成長感に注目が集まっている。その代表的な概念として心的外傷後成長(PTG: Posttraumatic Growth)があげられる。PTGは長期的な人間的变化と考えられており(Tedeschi & Calhoun, 2014)、その定義から時間の経過はPTGに対して影響を及ぼすことが予想される。しかし、2年経過することで関連要因が異なることは指摘されているものの(Helgeson et al, 2006)、時間が経過することでPTGが高まるかどうかについては一貫した知見が得られていない。

一方で、その個人の持つ時間的な感覚は出来事の意味付けに影響を与える。Klimer et al(2008)は、個人の将来への予測が良好であればPTGが促進されるということを示した。そのことを踏まえると、時間がストレス体験後の成長感に及ぼす影響は物理的に経過した時間だけでなく、当人がどんな時間の意識を持っているかが関わってくるものが予想される。

そこで本研究では、時間意識の探索的な分類を行いながら、「未来に意識を向けられる人であれば、時間の経過でPTGが上昇する」という仮説のもと時間の意識的側面と物理的側面がどのようにストレス体験後の成長に影響を及ぼすかを検討することを目的とした

方法

対象者:A県の専門学校生と、SNS上で募集したWebアンケートフォームに回答いただいた方。回答不備を除いた有効回答数は140件。平均年齢は24.96(SD=6.52)。

手続き:個人情報すべて統計的に処理され個人は特定されないことを明示したうえで、「今までに最も価値観が揺るがされたほどにストレスフルな体験」を、用意した体験のリストから一つ想起してもらったうえで質問紙に回答を求めた。体験の想起に伴って気分の変調が認められる場合にはいつでも連絡できるよう、公的機関の連絡先を付した。なお、本研究にあたっては東北大学教育学研究科の倫理委員会より承認を得ている。

使用尺度:

経過期間:想起した体験がどの程度前の出来事であったかを自由記述で回答を求めた。

成長感:千葉(2017)の作成したPTG尺度を使用した。「思いやり」「他者との関係」「新たな可能性」「さとり・肯定的な見方」「人間としての強さ」の5因子からなる。22項目。

時間意識:石井(2015)の時間意識尺度を使用した。「過去意識」「現在意識」「未来意識」の3因子構造。12項目。

結果

経過期間の群分け:経過期間による成長感への影響を確認するため、Helgeson et al(2006)の知見に基づいて2年以前

とそれより後に群分けを行い、PTG総合得点を対象としたt検定を行った結果、2年より後で有意に得点が低下した($t(138)=2.492, p<.05$)。他の因子についても一部で同じような結果が得られた。しかし、経過期間とPTGの総合得点について散布図を確認し、分布の状況から曲線推定を行ったところ有意傾向であり($F(2, 137)=2.376, R^2=.036, p<.10$)、時間がある程度まで経過するとPTGの得点は低下するが、それ以降は上昇するというU字型の相関が想定された。したがって、2群では十分な検討が出来ないことが予想されたため、経過期間について四分位法で4群に分け、以後の検討に使用した。

時間意識の分類:個人の持つ時間意識を分類するため、時間意識尺度についてWard法によるクラスター分析を行った。デンドログラムの状態から3群が適当であると判断し、時間意識尺度の各因子を従属変数として分散分析を行った結果から、各クラスターを「統合的時間意識群($n=75$)」「過去軽視群($n=21$)」「過去とらわれ群($n=44$)」と命名した。

経過期間と時間意識の影響:経過期間と個人の時間意識がPTGに及ぼす影響を検討するため、PTG総合得点を従属変数とした経過期間×時間意識群の二元配置分散分析を行った。その結果、時間意識群の主効果が有意であり($F(2, 128)=4.641, p<.05, \eta_p^2=.068$)、経過期間の主効果が有意傾向であった($F(3, 128)=2.411, p<.10, \eta_p^2=.053$)が、交互作用は有意ではなかった。時間意識群についてTukey-kramer法による多重比較を行ったところ、「過去とらわれ群」<「統合的時間意識群」となり、「過去軽視群」については有意差は見られなかった。経過期間の4群では多重比較による有意差は見られなかった。

考察

今回の結果では時間意識群に有意差が認められ、過去に対する意識が高い群(過去とらわれ)であるとすべての時間意識が高い群(統合的時間意識)に比較して成長感が低下するという結果が得られた。過去意識のみ低い過去軽視群には有意差が見られなかったことから、過去に対する意識のみが先行するとその後の成長感が低くなるものが予想されるが、過去意識のみが低い場合に高くなるわけではなく、すべての時間軸に対して意識づけられていることが成長感を高めることが示唆された。一方で、どの程度の時間経過で成長感に変化するかの明確な結果は得られず、時間意識との関連性も見出されなかった。しかし、経過期間と成長感との間にはU字型の相関が見出されたため、今後の検討が必要と考えられる。

利益相反開示:発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはありません

(CHIBA shusaku)